



2014年9月 第12巻第9号

### かく語りき—聖人の言葉

### かく語りき—聖人の言葉

「霊性の師は皆一つです。神様の同じ力が彼らを通じて働きます」

(ホーリー・マザー シュリー・サーラダー・デーヴィー)

「心を開いて、最高の理想をすべて求め、それらの声に耳を傾けよ。最も叡智に溢れる思考を考慮せよ。それから一人一人が自分で、自分の進む道を選べ」

(ザラスシュトラ)

### 今月の目次

- ・ かく語りき—聖人の言葉
- ・ 2014年10月の予定
- ・ 2014年8月マニラ例会  
「人間の愛と神様の愛」  
スワミー・メーダサーナンダ
- ・ 2014年8月、マハーラーヂ  
マニラを訪問

- ・ 2014年7月～8月の活動報告
- ・ 忘れられない物語
- ・ 今月の思想

### 今月の予定

#### ・ 行事 ・

『ラーマクリシュナの福音』とチャンティングの勉強会 (月2回)

メーダサーナンダ・マハーラーヂによる新しい勉強会です。

毎月第1、第3火曜日

10:00～11:00

チャンティングの発音や意味

11:00～12:00

ラーマクリシュナの福音解説

様々なサンスクリット語の発音を学びながら、祈り (チャンティング) の勉強と、ラーマクリシュナの福音を、エピソードも交えながらわかりやすく解説する勉強会です。どなたでも参加できますが、事前に連絡が必要です。

11月の勉強会は18日のみです。

場所：協会本館 無料

申込み&お問い合わせ：シャンティ  
090-5575-0971

[shanti.k-4649@ezweb.ne.jp](mailto:shanti.k-4649@ezweb.ne.jp)

※参加される方は、席のご用意と資料の準備がありますので、必ず2日前までにご連絡をお願いします。

(昼食の有無もお知らせください)

## 協会の行事

\*詳細は日本ヴェーダーンタ協会HPをご覧ください。

1日(土)東京・インド大使館例会

14:00～16:00

講演：バガヴァッド・ギーター (無料)

場所：インド大使館 : 03-3262-2391

お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428

2日(日)、9日(日)、16日(日)、30日(日)

14:00～15:30

ハタ・ヨーガ・クラス

場所：新館 (アネックス)

\*体験レッスンもできます。

お問い合わせ：羽成淳 080-6702-2308

2日(日)サットサンガ in 山形

お問い合わせ：高橋 023-645-3282

3日(祝)サットサンガ in 仙台

お問い合わせ：佐藤美弥子

[miyadevi@m6.gyao.ne.jp](mailto:miyadevi@m6.gyao.ne.jp)

15日(土)明治大学にて講話

13:00～14:30

お問い合わせ：明治大学

<https://academy.meiji.jp/course/detail/2053/>

15日(土)東京ヨガセンターにて講話

16:00～

お問い合わせ：羽成淳 080-6702-2308

16日(日)逗子定例会 10:30～16:30

場所：逗子本館

お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428

22日(土)関西地区講話 13:30～

17:00

場所：大阪研修センター

内容：「バガヴァッド・ギーターとウパニシャッドを学ぶ」

23日(祝)アカンダ・ジャパム 5:00～

20:00

お問い合わせ：三田村 090-7194-1274

28日(金)ナラ・ナーラーヤナ

現地でのお食事配布など。

お問い合わせ：佐藤 090-6544-9304

29日(土)明治大学にて講話 13:00～

14:30

お問い合わせ：明治大学

<https://academy.meiji.jp/course/detail/2053/>

**ラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ・ソサエティ・オブ・フィリピン マニラ・センターでの講話**  
**「人間の愛と神様の愛」 スワミー・メーダサーナンダ**  
**2014年8月10日**

前回3月にこちらに来た際、「人生の充実 (Fulfilment of Life)」をテーマにお話ししました。人生には基本的な欲求があり、そうした欲求をどうしたら満たせるかということについて話したのですが、主な欲求とは、永遠に生きたい、知識がほしい、喜びがほしい、そして愛し愛されたいということでした。

今日のテーマは「人間の愛と神様の愛 (Love; Human and Divine)」です。多くの聖典にこの「愛」という言葉が出

てきますが、「執着があってはならない」とも書かれています。では、愛と執着の違いは何でしょうか。私たちは、何かを愛すればそれに強く心が惹かれるのは当然だと考えており、愛と執着を区別することはあまりしません。愛しながら、心が囚われずにいることなどできるのででしょうか。この二つに違いはあるのでしょうか。

### 愛か執着か

愛と執着の違いを識別してみましよう。神様を悟りたいという霊的求道者にとってこれは重要なことですし、愛とは何か、執着とは何かを知りたい方にも大切です。

一般に、人間の愛は純粋な愛ではありません。執着を伴う愛や執着そのものは多くの苦しみを生み、霊的生活の大きな障害となります。では、執着にはどのようなものがあるのでしょうか。

多くの場合、家族や親戚、友人に対する執着ですが、お金や家、車のような物に対する執着もあります。また、名声や権力、地位に執着することもあります。しかし最も強い執着は、自身の心と肉体への執着です。

執着を伴う愛は、通常肉体と心の次元にある愛です。つまり、私たちは誰かの肉体や心を愛し、その人も私たちの

肉体や心を愛しているのです。人格には、肉体、感覚、心、知性、エゴ、真我（アートマン）などいくつもの次元があり、執着が関連するのは概ね肉体と心であると言いましたが、実際には、真我やアートマンなどの霊的レベル以外のすべての次元に関連します。肉体や感覚、心、知性、エゴを合わせたものを、哲学的には「肉体と心の複合体（body-mind complex）」と短くまとめて呼んでいます。

## 執着の表れと特徴

執着の表れにはどのようなものがあるのでしょうか。執着は、愛する人の近くにいたいという物理的的近接性を欲します。また、愛する人のことを考えたり想像したりしたいと感じ、そうすることで幸福や喜びを感じます。他には、愛する人を支配したい、さらに愛する人に支配されたいとさえ思うこともあります。いずれの場合にも、愛する人から愛されたいと感じ、愛のお返しを必ず期待します。

執着における愛には始まり、高まり、衰えがあり、時には愛が終わります。こんな話があります。年老いた男性の家を年老いた友人が訪ねてきました。男性は妻に、「ハニー、お茶を持ってきておくれ」とか「ダーリン、クッキーをくれないか」などと呼びかけました。これを聞いていた友人は驚いて言いま

した。「結婚して何十年経っても、君はこんなにも奥さんを愛しているんだな。あんなに愛情込めた呼び方をするなんて」これを聞いて男性は小声で言いました。「実は妻の名前が思い出せないんだ」

執着では、愛が別の愛に入れ代わることがあります。例えば、子供は親が大好きですが、結婚すると配偶者への愛の方が勝ります。さらに子供が生まれれば、子供への愛が勝るでしょう。そして孫が生まれれば、孫への愛が取って代わるのです。つまり、執着の対象は同じでなく、変わるのです。

執着を伴う愛の根源には実は自己愛があると聞いたら驚かれるかもしれませんが、この世で最も大きな愛は母親の子供に対する愛だと考えられています。それでさえも我が子への愛であり、すべての子供を愛しているわけではないのです。つまり、「私」「私の」という側面があるわけです。

## 執着の結果

執着の結果、何が生じるのでしょうか。まず、悲しみです。先ほど、執着を伴う愛では愛する人との物理的的近接性を求めるとお話ししましたが、一時的にせよ永続的にせよ愛する人と離ればなれになるとしたらどうでしょうか。悲しみが生じます。また、執着の結果、

嫉妬や怒り、時には暴力さえも生じることがあります。執着を伴う愛により、判断力を失い不正を行ったり他者を傷つけたりすることがあるのです。執着を伴う愛で私たちは盲目的になり、物事を適性に評価したり判断したり、また適切に行動する力を失ってしまうのです。

執着を伴う愛では、愛する人には優しく親切にしてもそれ以外の人には不親切で不公平になることがあります。インドの有名な叙事詩『マハーバーラタ』に最も良い例があります。盲目の王ドゥリタラーシュトラは、息子ドゥルヨーダナを盲目的に溺愛していました。そのため自身の甥たちであるパーンダヴァ兄弟に重大な不正を働き、最後には自身の王朝を破滅させてしまいます。我が子を愛するが余り甘やかすと、子供の人間性を高められないどころか、反対に、低めてしまいます。執着を伴う愛は、自身の自由を損ない愛する人の自由も奪ってしまいます。愛する人を支配したいと考えるため、自身と同じ態度を取り、同じ考えを持つことを愛する人に期待するのですが、その通りになることはめったにありません。これが軋轢を生み、関係に問題を生じさせるのです。例えば、母親が息子に執着する余り、息子が結婚した後も息子を支配したいと考えることがあります。これは息子の自由も息子の妻の自由も奪うことになります。

靈的求道者に執着を伴う愛があると、神を悟る障害になります。神様がいらっしゃる場所に世俗的な欲望は一つも存在し得ませんし、世俗的な欲望があるところに神様はいらっしゃれません。世俗的なことに執着があれば神様を愛することができないのです。その理由は、世俗的なことは一時的で有限であり、神様は永遠で無限だからです。一時的なものに対する愛と永遠なものに対する愛を同時に等しく持つことはできず、有限なものとは無限なものを同時に等しく愛することはできないのです。これらは互いに矛盾し合う、正反対のものなのです。

## 無執着の愛

愛を純粹に無執着にするにはどうすればいいのでしょうか。執着を伴う愛は多くの問題や困難を生む原因になるので、愛を純粹に無執着にすることが望ましいのですが、これはもちろん可能です。執着を昇華させ、愛を靈的にすればいいのです。愛を靈的にするのは、神様を愛し神様の現れを愛することを言います。

私たちが目にするもの、知覚するものは全て神様の現れです。ヒンドゥー教の聖典にある通り、物体も命あるものもすべて神様の現れですから、家族や親戚、友人、近所の人、世界中のあら

ゆる物や事が神様の現れなのです。

プラーナ（ヒンドゥー教の神話などを記した書物）にヒラニヤーカシプという悪魔とその息子プララーダの話が出てきます。プララーダは悪魔を父に持って生まれたにも関わらずヴィシュヌ神を強く信仰していました。ヒラニヤーカシプはプララーダを説き伏せてヴィシュヌは敵だと分からせようとし、さらには何度かプララーダを殺そうとさえしたのですが、その度にヴィシュヌがプララーダを救いました。ある時ヒラニヤーカシプはプララーダを挑発して、柱を指さしながら言いました。「あの柱にもヴィシュヌがいると言うのか」プララーダは答えました。「はい、主ヴィシュヌはあの柱の中にもいらっしゃいます」この言葉にヒラニヤーカシプは怒り、武器で柱を壊しました。その瞬間、主ヴィシュヌが壊れた柱から姿を現されました。この物語からも、すべてを神様の現れと見て愛することに努めなければならないことが分かります。

執着を伴う愛は「肉体と心の複合体」の次元に拡大されます。愛を霊的にすることは、愛を「魂（アートマン）」の次元に拡大することです。神様は魂という形で他者の中にいらっしゃると考えるのです。夫は妻を、肉体と心の複合体レベルで愛するだけでなく、魂のレベルでも愛するのです。妻も夫を

そのように愛し、親も子供をそのように愛するべきです。こうすれば愛は霊的になり、執着がなくなって純粹になります。もちろん、聞くのは簡単ですが実践は簡単ではありません。

## 神様をどのように愛するのか

神様の現れを愛する前に、まず神様を愛する必要があります。しかし、姿の見えない神様をどうすれば愛せるのでしょうか。私たちの多くは神様が好きですが、愛しているわけではありません。好きな物はたくさんあるものですが、好きだという気持ちがどれか一つに定まった時、それが愛になります。反対に、好きだという気持ちがたくさんある物に対してある時は、愛ではないのです。では、神様だけに思いを集中させ愛を育むにはどうすればいいのでしょうか。

シュリー・ラーマクリシュナを非常に尊敬していた家住の信者でバララーム・ボースという人がいました。バララームは師に出会う前から霊的修行をたくさん積んでいました。師に出会って間もない頃、バララームは、たくさん祈りを捧げて霊的修行を行っているのに神様を見ることができないのはなぜかと師に尋ねたことがありました。師は逆に、バララームに、神様への愛は我が子への愛と同じくらい強いかと質問しました。これを聞いてバララー

ムは、自分の神様への愛は我が子に対する愛ほどではないと素直に認めました。

目に見えない神様を愛することは簡単ではありません。そもそもそれ以前に、神様の存在を確信していなければなりません。それには、イエスやクリシュナ、ムハンマドなどの預言者らが聖典で述べている言葉を信じ、目に見えない存在を信じる必要があります。預言者は皆、非常に純粹で愛に満ち、利己的な動機を持っていませんでした。だから、神様の姿が目に見えなくとも、そうした預言者らの言葉を信じるべきなのです。

これらの預言者が生きていた時代はるか昔の話だ、と異論を唱える人もいるでしょうが、近代において、シュリー・ラーマクリシュナが彼らの言葉の正しさを認め、神の存在を確認しました。ナレンドラナート（ナレン。後のスワミー・ヴィヴェーカーナンダ）が初めて師シュリー・ラーマクリシュナを訪ねた時、「神を見たことがあるのですか」と尋ねると、師は「ああ、神を見たことがあるしお前に見せてやることもできるよ」と答えました。

ナレンはそれまでも他の宗教指導者を訪ねたことがありましたが、誰一人として「神を見たことがある」と確信を持って答えた人はいませんでした。

皆、聖典からの引用を述べただけでした。しかし、シュリー・ラーマクリシュナは自ら神を悟っていたので、その言葉には非常に説得力がありました。師が非常に誠実で、正直であることを心がけていたのは、その生涯を研究すればよく分かります。師の誠実さを物語る例は枚挙に暇がないのですが、一つだけお話ししましょう。

シュリー・ラーマクリシュナはある日、近所の人之家に後で行くと約束したのですが、その後すっかり忘れてしまい、真夜中に突然思い出しました。皆寝静まっていたが、師は信者を数人起こすと、彼らと共にランタンを持ってその人之家に行きました。家人は皆ぐっすり寝ていたので、師はわずかに家の戸を押し開けると片足だけ家に踏み入れました。これで約束を守ったこととなります。普通の人なら翌日訪ねて詫びるでしょうが、師は常に誠実であり続けなければならなかったのです。約束を破ることができなかつたのです。

神様に集中して神様への愛を育む方法は他にもあります。推論です。自然は自らを創造することができず、物体も他の物体を作り出すことはできません。物体を創造するには主体の存在が必要です。創造があるのなら創造者がいるはずです。では創造者は誰か。その存在を私たちは神様と呼ぶのです。しかし、神様の存在を確信しても、ど

のように神様を愛するののかという問題が次に出てきます。

抽象的なものを愛するのは難しいことです。神様は純粹意識であり、形はなく性質だけがあります（全知、遍在など）。私たちの心は思考や愛の対象を常に必要としています。心を集中させるには、形ある物を対象にする方が簡単でしょう。この理由から、ヒンドゥイズムでは様々な形の神様を想像し礼拝してきました。神様を様々な形で想像する理由として、靈的实践の初期段階では有形の神様を思い浮かべながら礼拝することから始めると良い、ということがあります。道を進むに従って、最終的に無形の神様に集中すれば良いのです。有形から無形へ進む、すなわち神様の姿を想像しながら礼拝することから始めて最後には神様の真の性質である無形の神様に到達するのです。

神様を愛する他の方法として、聖人や賢者を愛する方法もあります。有形の神様を礼拝するのは気が進まないのであれば、イエスやブッダ、クリシュナ、ラーマクリシュナ、ムハンマドなどの偉大な聖人、預言者に心を集中させて礼拝し愛すればいいのです。聖人への愛を育めば、神様への愛も形成されます。聖人の内側には神様だけが存在し、神様が満ちあふれています。聖人は外見が人間であっても内側は神様ですから、聖人を愛するのは神様を愛するの

と等しいのです。

広大な太平洋に触れたければ、大洋を航海する必要はなく、海岸に行って海水に触れればそれで太平洋に触れたことになります。同様に、聖人は神様という無限の大海の海岸なのです。聖人を愛すれば神様を愛することになります。この意味においてイエスは、神の息子を愛することは神を愛することであり、神の息子を見ることは神を見ることになるとおっしゃったのです。同じように、ブッダやクリシュナ、ラーマクリシュナなどの信者は彼らを通して神様を見、神様を愛することになるのです。

さらに神様を愛する方法には神様との関係を築くという方法もあります。神様を畏怖の念を持って見るのではなく、愛を持って見るのです。ヒンドゥイズムでは、神様を父と見なす、母と見なす、師と見なす、友と見なす、息子と見なす、恋人と見なすなど、具体的な見方が示されています。最も一般的なのは、神様を母や父、師として見なす方法です。また、神様をベビー クリシュナ（小さい頃のクリシュナ）と見なすこともよくあります。おっぱいをあげる、食事をあげるなど、様々な方法で世話をして神様への愛を育むのです。このように人間の関係を神様に重ね合わせることで、神様への愛を育むことができるのです。



神様とつながって何度も神様のことを思い出すのも、神様と親しい関係を築く方法です。霊的实践を行って祈りを捧げたり毎週教会に行ったりすれば神様をその時は思い出しますが、教会を出れば忘れてしまいます。「日曜だけの信者」にならないよう、毎日朝から晩まで神様を思い出すよう努めねばなりません。

## 神様を思い出す

決まった時間に規則的に祈りを捧げたり瞑想したりするほかに、神様を思い出す機会を一日に何度か作ると良いでしょう。例えば、朝起きたら神様や聖人の像を見る、飲食をする時には心の中で初めにそれを神様に捧げてお下がりとしていただく、などです。こうしたことを習慣にすると、それらを行う時に神様とつながり神様を思い出すことができ、また、口にする食べ物や飲み物に不純なものがあればそれを取り除くことができるという、二つの目的に適うのです。

また、家を出る時や車を運転する時も神様のことを思い出しましょう。こうすることで神様とつながることができ、守られていると感ずることが出来ます。仕事に取り掛かる時にも神様を思い出し、さらにパソコンのデスクトップをイシュタ（自身が選んだ特定の神様）の絵や写真などにすると神様を何度も

見て思い出すことができます。そして、仕事が終わった時や帰宅した時にも神様を思い出し、寝る時にも神様や聖人の像を見るようにしましょう。

こうした小さな積み重ねを日々実践することで心の平安を得られ、日中、仕事にも穏やかで静かな心でいられ、神様への愛も育めます。こうした方法をとらないと神様を愛するのは難しいでしょう。また、毎日瞑想をする人にとっては瞑想中の集中力を高めます。瞑想の時だけ短時間神様のことを考え、それ以外の時間は神様のことを一切考えないのであれば、瞑想中神様に集中するのは極めて難しいでしょう。

このようにして神様につながっていることは、霊的实践や神様への愛を育むためだけでなく、ストレスのコントロールや心の平安を保つことにも大変役立ちます。常に仕事のことを考えていると仕事にまつわるストレスを受け続けてしまいますが、時折神様に集中することで仕事から自分を切り離すことができ、仕事で生じる緊張やストレスをコントロールできます。これが、仕事や外界から心を切り離して内に向けることであり、内在する神様を見ようとするのです。

## 神様の御名を唱える

しかし、神様とつながる最も簡単な方

法は、神様の御名を唱えることです。一日中できるだけ多く御名をくり返し唱えましょう。グルからイニシエーションを受けた人は、マントラを唱えても良いですし、イシュタの御名を唱えるだけでも良いです。ブッダ、ブッダ、ブッダ…、イエス、イエス、イエス…、マリア、マリア、マリア…、ラーマクリシュナ、ラーマクリシュナ、ラーマクリシュナ…、クリシュナ、クリシュナ、クリシュナ…などと唱えましょう。これが神様とつながる最もシンプルな方法です。車の運転などをしている時には、急にそれをやめて瞑想することはできませんが、神様の御名を唱えることは運転中でもできますし、そうすれば神様とつながっていられます。

そして、神様のあらゆる現れの中に神様の存在を見ようと努めましょう。万物の中に神様を見るのです。そうすることで、執着を昇華させ愛を靈的にすることができます。ある時シュリー・ラーマクリシュナの女性信者が、神様を瞑想しようとするといつも甥っ子の顔が浮かんでくると師に話しました。これは明らかに執着の現れです。すると師は、甥をベビー クリシュナと見なし、クリシュナにお仕えしてお世話をすると考えるように言いました。こうすることで執着は靈的で純粋な愛に形を変えられます。実際、この助言に従ったことで、その女性信者は執着を捨てられただけでなく靈的生活におい

ても大きく進歩しました。

## 執着を昇華させる練習

イエスやシュリー・ラーマクリシュナが弟子に対して感じた愛は、非常に強い愛でしたが執着は伴いませんでした。ラーマクリシュナ僧団の僧侶やカトリックの神父、尼僧は、病院で働く場合患者をシュリー・ラーマクリシュナやイエスと見なし、学校などの教育機関で働く場合は、生徒らをシュリー・ラーマクリシュナやイエスと見なします。信者や家住者でも同じことができます。子供や配偶者の中に神様がいらっしゃるのだと考えるようにするのは、

しかし、相手が自分を同じように見なければどうすればいいのでしょうか。そんなことはどうでもいいのです。相手の反応がどうであれ、自分が相手を神様の現れであると心から考え続ければいいのです。長い間に、相手も必ず変わってきます。

他者を神様の現れと見なし、相手に同じことを期待せずに続けましょう。そうすることで、人間の愛は神様の愛になり、人間の愛から不純な物や執着がなくなります。盲目的な愛、他者に不正を為す愛はなくなり、他者にも自身にも自由を与え、純粋な喜びの源となります。そして、このような愛からは充実感が得られ、愛する側も愛される

側も共に高められるのです。

## 2014年8月、マハーラージ、マニラを訪問

8月7日（木）～11日（月）、マハーラージはフィリピンのマニラにある Ramakrishna Vedanta Society of the Philippines Manila Centre（以下、フィリピン・センター）を訪問しました。7日は午後早くに成田を出発し、マニラ空港で出迎えてくださった現地の信者さんらと共にフィリピン・センターに行かれました。



9日（土）の夕方、信者さんの家で行われたサッティヤナーラーヤン・プージャ（Satyanarayan Puja）に参加し、礼拝を執り行いました。礼拝後、「人間の愛と神の愛（Love: Human and Divine）」をテーマにお話しし、その後皆でプラサードの夕食をいただきました。参加者は50名程でした。





10日(日)は、午前中にフィリピン・センターにてセンターのメンバーと打ち合わせを行い、昼食後、メンバーと共に、センター近隣の貧困家庭に粉ミルクの無料配布を行いました。



この活動はフィリピン・センターで毎月行っています。その後、午後4時30分から、フィリピン・センターで公開

講話会を開催。賛歌朗唱の後、「人間の愛と神の愛」をテーマに講話を行いました。そして、茶菓の休憩を挟んで、質疑応答と誘導瞑想を行いました。

11日は早朝にフィリピン・センターを発ち、午前のフライトで日本への帰途に就きました。マニラ滞在中マハーラージは、行事の入っていない時間には、センターを来訪する信者や友人の方々とお話ししたり信者さんの家を訪問したりするなどして、5日間という限られた時間を、可能な限り現地の方々と共に過ごしました。

## 2014年7月～8月の活動報告

### 日本ヨーガ療法学会研究総会に出席

7月4日(金)～5日(土)、マハーラージは、岐阜県多治見市のセラミックパークMINOにて開催された日本ヨーガ療法学会第12回研究総会に出席しました。総会にはヨーガ教師を中心に約1500名が出席し、同学会の顧問であるマハーラージは、開会式でマントラの詠唱を先導しました。また、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ(スワミー・ヴィヴェーカーナンダ)生誕150周年祝賀記念行事のスライドを上映しながら、スワミー・ヴィヴェーカーナンダについての短いスピーチも行いました。会場では、協会出版の書籍なども販売されました。

## パドマ・ヨーガ研修会で講話

8月24日(日)、東京都文京区の日風会館でパドマ・ヨーガ・アシュラムにより開催された研修会にて、マハーラージは「ウパニシャッドのエッセンス」をテーマに講話を行いました。主催者のパドマ・ヨーガ・アシュラム代表 平野久仁子さんに当日の様子についてレポートをいただきましたので、その一部を抜粋・編集して以下にご紹介します。

「パドマ・ヨーガ・アシュラムでは2001年よりほぼ毎年1回、マハーラージをお招きしての研修会を開催してきましたが、今回は11回目でした。マハーラージは1時間40分にわたり、数々のサンスクリット語を交え、ウパニシャッドの真髓について終始、日本語でご講義され、その後の質疑応答の時間には、参加者からの質問に対して、大変わかりやすく答えられました。そして最後にはマハーラージの指導により瞑想の実践を行ないました。参加者からは、『非常によかったです』、『お話がわかりやすかったです』といった感想が多数ありました。また、『引き続きウパニシャッドの講座を受けたいです』、『難しい印象があったウパニシャッドの印象が変わりました』、『今後も理解を深めていきたいと思いました』といった感想も多くあり、さらにマハーラージからウパニシャッドを学ぶ機会を

持てれば、とも感じた時間となりました。参加者は56名でした」

## 今治サットサンガで講話

8月30日(土)～31日(日)、愛媛県今治市で開催されたサットサンガにて2日にわたり講話を行いました。30日は午後5時から附属寺太子堂で「今日から始める瞑想」をテーマに講話を行い、講話の後誘導瞑想も行いました。

翌31日は、朝倉ふれあい交流センターにて午前5時から午後4時まで秋のリトリートが行われ、マハーラージは「より楽に生きるために、今できる事は…」をテーマに講話を行いました。両イベントとも、シャンティ・ヨガ・シオジの塩路法子さんを中心とする6名が主催されました。スタッフの一人である松本真知子さんから、サットサンガについてのレポートをいただきましたので、その一部を抜粋・編集して以下にご紹介します。

「(30日の講話では)参加者40名の約半分が瞑想は初めてでしたが、マハーラージの丁寧でわかりやすい、時にユーモアも入るお話で全員講義に集中でき、誘導瞑想も深い静寂の中、30分にわたり行われました。終了後のアンケートの結果では、80%の方が『瞑想を続けてみたい』と回答され、100%の方が『マハーラージのお話をまたお聞

きしたい』ということでした。皆さんも求めていらしたのかと改めて思いました。

翌 31 日は、場所を自然がいっぱいの朝倉ふれあい交流センターに移してリトリートが行われました。朝 5 時からの瞑想は、丘の中腹の景色のよい草っぱらで、まだ暗い中始まりました。蚊の襲撃に遭いながらも、すがすがしい時間でした。(中略) マハーラージとちょうどよい距離感を保てる人数である 20 名の参加者は、20 代から 70 代まで、ヨーガで顔なじみの方から全く初めてという方もいらっしゃるなど様々でしたが、有意義な時間を共有して深い絆を感じ、お互いに瞑想を毎日続けようねと励ましあうことができました」

## 重要なお知らせ

8 月 30 日 (土) ~9 月 3 日 (水)、インドのナレンドラ・モディ首相が来日され、東京・ホテルオークラで開催されたレセプションにてモディ首相は安倍晋三首相に、『バガヴァッド・ギーター』と、ラーマクリシュナ・ミッション発行の書籍『スワミー・ヴィヴェーカーナンダと日本』(日本ヴェーダータ協会発刊の書籍の内容を基に作成されたもの) を贈呈されました。



また、インド大使館でモディ首相は、同大使館のカルチュラル・センターの名称を「ヴィヴェーカーナンダ・センター」に改名したことを記念するプレートを設置する式典を主催されました。



さらに、9 月 2 日 (火)、モディ首相を主賓として在日インド大使ディーパ・ゴパラン・ワドゥワ閣下が主催したパーティーに、マハーラージも出席

し、モディ首相に著書「Varanasi, at the Crossroads」(全2巻)を贈呈しました。

## 忘れられない物語

### 神は祈りを聞き入れてくださる

村の司祭は聖者であった。村人は困ったことが出てくるといつも司祭に助けを請い、その度に聖者は森の中の特別な場所に引きこもって特別な祈りの言葉を唱えた。神は聖者の祈りを常に聞き入れてやり、村人は常に救われた。

司祭が死に、村人は困ったことが出てきたので次の司祭に助けを請うた。次の司祭は聖者ではなかったが、森の中の特別な場所と特別な祈りの秘密を知っていた。次の司祭は言った。「神よ、あなたは私が聖者でないことはご存じでしょうが、だからといって村人に恨みはないはずですよ。ですから、私の祈りを聞き入れて助けてください」こうして神は次の司祭の祈りを常に聞き入れてやり、村人は常に救われた。

次の司祭も死に、村人は困ったことが出てきたのでその次の司祭に助けを請うた。その次の司祭は特別な祈りを知っていたが森の中の特別な場所は知らなかった。そこで、その次の司祭は言った。「神よ、どこで祈るかなどあなたは気にされるのでしょうか。すべての

場所はあなたの存在で聖所になるのですよね。ですから私の祈りを聞き入れて助けてください」こうして再び、神はその次の司祭の祈りを常に聞き入れてやり、村人は常に救われた。

その次の司祭も死に、村人は困ったことが出てきたのでそのまた次の司祭に助けを請うた。そのまた次の司祭は特別な祈りも森の中の特別な場所も知らなかったが、こう言った。「神よ、あなたが重視されるのは祈りの言葉ではなく、苦悩にあえぐハートの叫びでしょう。ですから私の祈りを聞き入れて助けてください」こうして再び、神はそのまた次の司祭の祈りを常に聞き入れてやり、村人は常に救われた。

そのまた次の司祭も死に、村人は困ったことが出てきたので、そのあとの司祭に助けを請うた。そのあとの司祭は祈りよりも金が大切で、神に向かってこう言った。「神よ、あなたはご自分が作り出した問題を完璧に解決する力をお持ちなのに、私たちが縮み上がって助けを請うまで何一つなさろうとしないなんて、どういうことですか。村人をお好きなようにされるがいい」そのあとの司祭は、これだけ言うとやりかけの仕事に戻った。こうして再び、神はそのあとの司祭の祈りを常に聞き入れてやり、村人は常に救われた。

(Anthony de Mello 神父著『The Prayer of the Frog』より)

## 今月の思想

「物事で満ちあふれているとは神がい  
らっしゃらないことだ。物事が全くな  
いとは神が満ちあふれていることだ」  
(マイスター・エックハルト)

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: [info@vedanta.jp](mailto:info@vedanta.jp)